手塚治虫作品集『透明人間』

萩原　義雄

2010/05/20　更新

魔か？　人か？　とつじょ、透明人間あらわる！

ドイツは伝説のくにである。いまでもいなかへいくとあくまや妖怪をしんじている人がおおく

うっそうとしげった森には、なお、まものがすんでいるとされている。

よどんだみずうみにはかっぱが……（いや、これはじょうだん）

ふるい城あとには、吸血鬼のうわさがたえない。

ドイツは科学文明のすすんだ国なのだが……。

ふしぎに、めいしんや怪談がおおいのだ。

ときどき、村にふしぎなことがおこる。

それは、死人のたましいのしわざだといわれている。

ぶきみなしずけさは、ひとびとの心をおののかす。

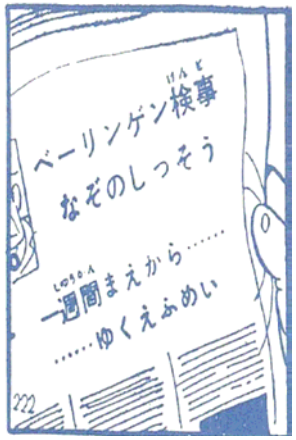
ことに、雨がふると、あたりのものすごさは、いっそうましてくる……

横書きのセリフ

「たすけてくれえ！おばけだ。ゆうれいだ。ばけものやしきだーっ」

〔『透明人間』30齣〕

この部分は、手塚自筆の手書き文字によるセリフとなっている。これにより、この場に恐れおののく二人のパトロール警察官の心の臨場感を際立っている。



右手に持つ新聞記事風に活字記載

「ベーリンゲン検事なぞのしっそう／一週間まえから……ゆくへふめい」〔222齣〕

その左手には、手紙手書き文字にて記載

「ケンーさま／まいる　エリゼ・ベーリンゲン」〔223齣〕

といった横書きの文章と手紙の差し出し人の名が見えている。

と差し出し人の名が見えている。

手帳書き込み文字・手塚自筆による手書き

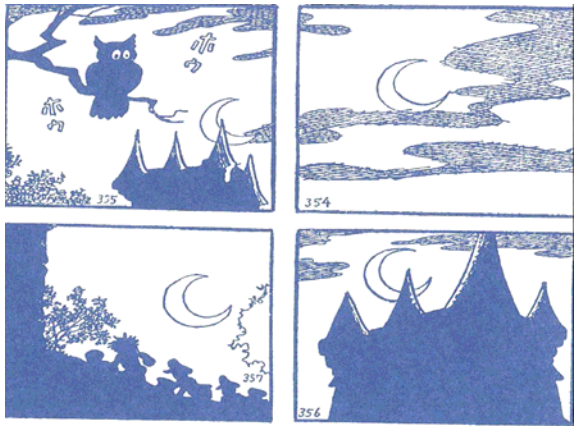
「もう、がまんがならん。ゴンドラめ。これいじょう、出世するなら、あいつと決闘だ！」〔302齣〕

「きょうのごご、のいちご丘でやるぞ！＊」〔304齣〕

※ここで、**作者手塚は手書き文字の多くを横書きに求めていることになる**という前提判断をもって、今後の鑑賞すべき作品を見ていくことをお薦めする。

さらに、漢字表記した「出世」「決闘」のふりがなは漢字の下に付記するという特徴も手書き文字にはある。活字にした上記の新聞記事における漢字表記におけるふりがなが「検事」「一週間まえ」といった具合に、漢字表記の上にふりがながなされている。このことは手塚独自の横書きふりがな表記法がここに表出していることになる。この点も考慮していくところとなる。

セリフ内容と景観絵における時の概念

「カール、今夜は満月だ。やしきのうらの荒れ寺でなにかあるはずだ。ぼくはそのすきにやしきにしのびこむ」〔350齣〕

とあって、「今夜は満月だ」とケン1の会話表現が前提にある。ところが、次354・355・356・357と連続表示される景観絵を見てお氣づきになるであろう。なんと「三日月」なのである。とすると、景観絵と前のセリフが時という概念を書き手である手塚のなかで超えてしまっていることになる。こうした時の矛盾する場面を見逃さずに見て欲しい。